

# RM モデルを用いたオンライン学習者 コンピテンシーベースの振り返り活動の提案

根本淳子<sup>†1</sup> 竹岡篤永<sup>†2</sup> 高橋暁子<sup>†3</sup> 鈴木 克明<sup>†4</sup>

本発表では、修士課程のプログラムの一環として設置した1年次向け「ポートフォリオ演習 I」におけるオンライン学習者コンピテンシーをベースとした振り返りとアクションプランの策定に焦点を当てる。振り返り活動とアクションプランのつながりを意識して取り組んだ、本活動の設計と実践について報告する。

**キーワード:** オンライン学習者コンピテンシー, 振り返り, RM モデル

## Development of Online Learner Competencies Based Reflection Activities using RM model

JUNKO NEMOTO<sup>†1</sup> ATSUE TAKEOKA<sup>†2</sup>  
AKIKO TAKAHASHI<sup>†3</sup> KATSUAKI SUZUKI I<sup>†4</sup>

In this paper, we focus on the final stage of the "Portfolio Exercise I" for the first year that was established as part of the master's program. This report includes the design and practice of this activity, working with consciousness of the connection between the retrospective activity and the action plan.

**Keywords:** Online Learner Competencies, Reflection, RM model

### 1. はじめに

学修活動の振り返りは、自身の学習を客観的にとらえ、活動と成果を評価する営みである。この評価活動、つまり自己分析は、次の学習への計画につながり、ゆえに学びを深めるサイクルを生み出すことができる。ポートフォリオは振り返り活動を促進する仕組みとして、幅広く取り入れられている。学習の深化といった利点がある一方、振り返り活動は基本の学習活動が存在する上に実現される活動であるため、授業やカリキュラムの構成によっては学習者に負担感を与える可能性が高い。ポートフォリオ活動にも様々な形態が存在するが、カリキュラム全体を通して活用するためには、ポートフォリオ活動とカリキュラムのデザインは統合的に検討されることが必要であり、長期的な運用を意図した場合、学習者の負担を考慮した設計が必須であろう。

熊本大学大学院教授システム学専攻（以下、本専攻）は、主に社会人を対象として、eラーニングの専門家を養成するオンライン大学院である。本専攻の修士課程では、ポートフォリオ演習科目を必修科目として実施している。2015年度から「ポートフォリオ演習 I・II」科目を順次新設し、段階的なポートフォリオ作成活動を必修とした。本科目は、科目設置前から選択科目などを通じて実施してきた振り返

り活動を集約して作られたもので、本専攻が設定した全19項目のコンピテンシー（コア12項目、オプション7項目）に基づき、学習者が学修成果物をエビデンスとして達成度を自己分析する活動が中心となっている[1][2]。さらに新しい取り組みとして、オンライン学習者コンピテンシー（本専攻が設定したコンピテンシーとは別物。後述）をベースとして振り返りとアクションプランの策定を追加している。

本発表では、修士課程のプログラムの一環として設置した1年次向け「ポートフォリオ演習 I」におけるオンライン学習者コンピテンシーを用いた振り返りとアクションプランの策定に焦点を当てる。振り返り活動とアクションプランのつながりを意識して取り組んだ、本活動の設計と実践について報告する。

### 2. 実践概要

#### 2.1 オンライン学習者コンピテンシー

ibstpi (International Board of Standards for Training, Performance and Instruction) は、人材育成のパフォーマンスやインストラクションに関する基準を開発し提供しているアカデミックかつ実践的な団体であり、人材育成にかかわる人材のコンピテンシーの策定と普及に取り組んでいる。ibstpi では、インストラクショナルデザイナーやトレーナー、研修マネージャーなどのコンピテン

<sup>†1</sup> 愛媛大学 Ehime University  
<sup>†2</sup> 明石工業高等専門学校 National Institute of Technology, Akashi College

<sup>†3</sup> 徳島大学 Tokushima University  
<sup>†4</sup> 熊本大学 Kumamoto University

シーを開発し、最近では、学習者側のコンピテンシー開発にも取り組み、2012年に公開している[3].

オンライン学習者コンピテンシー(Online learner competencies: 以下、OLL コンピテンシー)は、3つの領域、14項目で構成される(表1). 3領域とは、「個人」(コンピテンシー1から6)、「学習」(7から11)、「インタラクション」(12から14)である。「個人」の領域には、オンライン学習に必要な個人の態度・スキルや知識が含まれる。「学習」ではフォーマル学習を中心とした学習プロセスに焦点が当てられている。「相互作用」はオンライン学習が持つ柔軟性や相互作用を活用するスキルに着目し、オンラインでの学習の質を高めるため要素が含まれている。このように、オンライン学習に特化した内容もあるが、それ以外の学習でもめられるスキルがOLLコンピテンシーに含まれており、これらは自律的な学習者としてのスキルと捉えることもできる。

OLLコンピテンシーには、さらに詳細な記述であるパフォーマンス記述が用意されている。14項目で構成されるOLLコンピテンシーにそれぞれ4-8程度、合計78項目の詳細記述がある。詳細記述はコンピテンシーを充足するための観察可能な行動として示されている具体的な例示であるため、学習者はこれらのパフォーマンス記述を参考に、コンピテンシーの理解を深めることができる。

## 2.2 OLLコンピテンシーとRMモデルを活用したアクションプラン

本専攻での学習はすべてオンラインで提供されるため、自律的な学習スキルが高く求められる。そこで、「ポートフォリオ演習I」の中で、ibstpiのOLLコンピテンシーを用いた自己評価を行い、オンライン学習者としてのスキル分析を行う活動を設定した。さらに、その分析結果を踏まえて、次年度へのアクションプランを本科目の中で最終活動の一つとして課すこととした。活動の流れを以下に示す。

### (1) OLLの自己評価

OLLコンピテンシー14項目それぞれに対して(表1)、以下の5段階で自己評価を行う。各コンピテンシーには、パフォーマンス記述が用意されており、コンピテンシーの自己評価と併せて、どのパフォーマンス記述が達成できているかも確認した。

- |   |
|---|
| 0: できていない。該当内容に対して一切関心がない、重要であるという意識がない。                |
| 1: 重要性は理解しているが、実行には移せない。大事なというのは分かっているが、そのような認識はしているだけ。 |
| 2: とりあえず失敗しても取り組んでみている。自分なりに工夫をしている。                    |
| 3: なんとか最低限進むように、実行している。自分でできないところは、教員や仲間へ支援を受けながら進められる。 |
| 4: 誰の助けもなく自分一人で行える。                                     |

### (2) アクションプランの策定

OLLコンピテンシーの自己評価結果を参照しながら、次年度に向けたアクションプランを検討する。本科目には、ポートフォリオショーケースの作成などの活動があるため、課題の規模は最小限に抑えた。また、OLLコンピテンシーの5段階自己評価結果は、自己の強みや弱みを視覚的に把握しやすいが、アクションプランの策定に必要な情報とは言いにくい。そこで自己評価の結果を具体的なアクションプランへとつなげるために、アクションプランを架空の先輩ケースとして3つ例示し(図1)、それらを参考に自己のアクションプランを検討させた。

この先輩ケースは、3部構成(自己分析・3領域からの自己分析結果・アクションプラン)になっている。過去の学習者の活動や考えを参考にOLLコンピテンシーベースの振り返りからアクションプランを検討するためのサンプルとして準備したものであり、リフレクションメタモデル(RMモデル)と呼んでいる。RMモデルは、他者の振り返りの過程を示したもので、他者の振り返りの様子を自分の振り返りにつなげるための役割を果たす。

振り返りは高次のスキルであり、どのように行えばよいのかのイメージがしにくい。また、自身についてすぐに客観的にとらえることが難しい場合もある。そこで、複雑な学習には文脈を提示して理解を促す手法[4]やストーリーを提示することによって、異なる文脈から概念を理解を促す考え方[5]を参考に、本アプローチを考えた。

#### 【参考】架空の先輩のリフレクション



図1 アクションプランのサンプル

Figure 1 Example of Action Plan

## 3. 実施結果

### 3.1 OLLコンピテンシーベース自己評価

本活動に取り組んだのは9名であった。表1は科目最後に実施したOLLコンピテンシーの自己評価結果である。2.2で示した5段階で評価した。全14項目のうち評価に0(できていない)をつけた人は0名、1(重要性は理解しているが実行には移せない)を複数項目につけたのが1名で

あった。

14項目の中で高い評価がつけられたのは「1. オンライン学習に現実的な期待感を設定する」「6. テクノロジーをうまく使いこなす」「10. セルフ・モニタリングする学習者である」の3項目であった。一方、「5. オンライン学習者として法的・倫理的・学問的な基準を遵守する」は最も評価が低く、「4. 時間を効果的にやりくりする」がそれに続いた。

表 1 OLL コンピテンシー自己評価結果

Table 1 Result of OLL Competencies' Self-evaluation

	OLL コンピテンシー	平均	SD
個人	1. オンライン学習に現実的な期待感を設定する	3.0	0.5
	2. 学習目的を達成するための決意を維持する	2.8	0.4
	3. オンライン学習のチャレンジをやりくりする	2.7	0.8
	4. 時間を効果的にやりくりする	2.3	0.8
	5. オンライン学習者として法的・倫理的・学問的な基準を遵守する	2.1	0.6
	6. テクノロジーをうまく使いこなす	3.0	0.8
学習	7. 能動的な学習者である	2.8	0.6
	8. 機知に富む(問題解決ができる)学習者である	2.4	0.7
	9. 内省する学習者である	2.4	0.5
	10. セルフ・モニタリングする学習者である	2.6	0.8
相互作用	11. 学んだことを応用する	3.0	0.7
	12. 効果的なオンラインコミュニケーションに関与する	2.6	0.7
	13. 生産的なオンライン上の相互作用に関与する	2.6	0.8
	14. 知識構築のための協調的オンラインコミュニケーションに関与する	2.7	0.9

### 3.2 アクションプランの作成結果

提出された9名のアクションプランは、すべてサンプルと同じ3部構成(自己分析・3領域からの自己分析結果・アクションプラン)で書かれていた。この3領域のうち、記述量が最も多かったのは、1年間の活動を振り返る語りに対応する「自己分析」であった(自己分析・結果・アクションプランの全員分の文字数合計は、それぞれ7,927文字、3,442文字、2,799文字)。

作成されたアクションプランをOLLコンピテンシーの3領域に分類すると、「個人」が7件、「学習」7件、「相互作用」4件であった(複数回答あり)。3領域のうち、優先順位が高いと思われる個人・学習の領域に集中したと考えられる。また、アクションプランの中で多くみられた記述は計画を立てて実行するための時間の管理(7件)についてであった。このプランは、OLLコンピテンシーでの自己評価の低い「4. 時間を効果的にやりくりする」に対応していると考えられる。一方、自己評価の低かった「5. オンライン学習者として法的・倫理的・学問的な基準を遵守する」に相当するアクションプランは見られなかった。

### 3.3 本活動とRMモデルに関する追跡調査

授業実施後に事後アンケートをオンライン上に用意し、本活動に関する意見を収集した。回答者は1名のみであっ

た。架空の先輩リフレクションケース3件すべてを読み、わかりやすかったという回答を得た。ケースとして提示された「分析などに納得できた」か、「自己分析は役立った」かの問いに対して、5段階評価の「4. どちらかというと思う」という回答であった。また、本活動は個人活動を中心にしたが、受講者間で「話し合う場をもうけた方が良いかどうか」についてたずねたところ、「2. どちらかというと思う」という回答があった。アクションプランの策定は「自分の学習の強みや弱みを再認識するために役に立つ」に対しては「1. そう思う」と回答したが、「自分の学習の強みや弱みを新たに発見するために役に立つ」には「2. どちらかというと思うは思わない」と答えた。その理由として、本活動以外にも「自分の強みや弱みについて考える機会がある」と述べている。振り返り活動は、個人の活動が中心であることを踏まえると今回提示した先輩ケースの例示は振り返りのリソースになり得るとことが示唆された。

一方で、アクションプランはOLLコンピテンシーに依存しているため、全体を考える側面は弱いと受け止め“どのように過ごせば、何が達成できれば、自分は「今後の学びがより充実したものになる」と言えるのか、もっと意識してアクションプランを立てると、より有益な活動になると思います”と提案があった。

## 4. まとめ

本稿では、修士課程のプログラムの一環として設置した1年次向け「ポートフォリオ演習I」における最終段階の活動に焦点を当てた学習活動について報告した。対象活動は、OLLコンピテンシーベースの振り返りとアクションプランの策定であり、振り返り活動とアクションプランのつながりを意識して取り組んだ。学習者は手続きに沿って、OLLコンピテンシーでの自己評価を行い、サンプルケースを参照しアクションプランを作成した。活動自体は大きな混乱もなく、円滑に進んだ。

作成されたアクションプランには、自己分析での改善点を中心に今後の活動計画が述べられていた。アクションプランは例示した先輩ケースを参考に参加者全員が3部構成で提示した。アクションプランの中でも、最初の項目であった「自己分析」の文章量が多かった。自己分析は、これまでの活動の振り返りとしての個人の語りとして書かれていることが多く、OLLコンピテンシー自己評価結果を踏まえて新たに検討する部分である。自己分析の書きぶりから、先輩ケースを参照に書かれたことが確認できるものがあったが、併せて、個人の考えや気持ちが表現されている部分でもあった。語りが出ていた部分は、RMモデルの設定の意図が伝わっているとも考えられる。また、追加アンケート調査から、提示した先輩ケースが有用であることも示唆された。しかし、データ数が限定されているため、提出

されたアクションプランの詳細分析を行い、また、追加データを集めながら、改善や効果については検討が必要である。

## 謝辞

本研究は JSPS 科研費 15K00484 の助成を受けた。

## 参考文献

[1] Nemoto, J., Takahashi, A., Takeoka, A., Nakano, H. & Suzuki, K. Designing and Evaluating “Portfolio Practice I,” a Course for Online Graduate Students. 2017, International Journal for Educational Media and Technology,

[2] 高橋暁子, 竹岡篤永, 根本淳子, 久保田真一郎, 鈴木克明. オンライン大学院におけるコンピテンシーに基づく e ポートフォリオの量的な分析. 日本教育工学会研究報告集 2017(4)

[3] Beaudoin, M., Kurtz, G., Jung, I., Suzuki, K., & Grabowski, B. L. Online Learner Competencies: Knowledge, Skills, and Attitudes for Successful Learning in Online Settings. 2013, Information Age Publishing.

[4] Shank, R. C., Berman, T. R., & Macpherson, K. A. Learning by doing. In C. M. Reigeluth (Ed.), Instructional-design theories and models. 1998, A new paradigm of instructional theory (Vol. II, pp. 161-81). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

[5] Parkin, M. Tales for Trainers: Using Stories and Metaphors to Facilitate Learning, 1998, Kogan Page, London.